

## 島の魅力を活かした水産業PRの取組

ーブルー・ツーリズムで浜に元気を！！ー

与論町漁業協同組合青年部 与論島漁業集落

阿 野 忠 義

### 1. 地域の概要

与論島は鹿児島県の最南端に位置する周囲 23.65km、面積 20.58km<sup>2</sup> の隆起珊瑚礁で形成された平坦な島（最高点は 97m）である。人口は 5,190 人、世帯数は 2,057 世帯（平成 27 年現在）で周囲をコーラルリーフで囲まれている。与論島へのアクセスは、鹿児島港と那覇港を結ぶフェリーと鹿児島ー与論間及び那覇ー与論間を結ぶ空路がそれぞれ 1 日 1



図 1 与論島の位置. 右上：航空写真、右下：百合ヶ浜.

便ある。1970 年代の離島ブームの頃は「東洋に浮かぶ一粒の真珠」と謳われ、年間約 15 万人の観光客が訪れたが、平成 24 年には年間約 5 万人まで減少した。しかし、奄美群島全体の島興しの起爆剤として世界自然遺産登録を目指しており、また、「死ぬまでに行きたい世界の絶景日本編」でも透明度抜群の海や百合ヶ浜が紹介されるなど注目が集まっている（図 1）。

### 2. 漁業の概要

与論町漁業協同組合は島の中心地である与論町茶花に位置し、組合員数（平成 27 年度末時点）は 281 名（正組合員 63 名・准組合員 218 名）で、主要な漁業種類はソデイカ・マグロ旗流し漁業やタチウオ建縄漁業などの沖合での一本釣漁業である。

平成 27 年度の漁業生産量は 347 トン（島内向け 87 トン・島外出荷 260 トン）で漁獲物は主にフェリーを利用して鹿児島県本土や沖縄県へ出荷されている。また、平成 27 年度の漁業生産額は 3 億 2,000 万円（島内向け 6,000 万円・島外出荷 2 億 6,000 万円）であった。平成 27 年度はソデイカの豊漁及びソデイカとタチウオの単

価が高騰（タチウオは過去最高値）した影響で、漁協発足以来目標として掲げてきた3億円を初めて達成した（図2）。

また、生産量や生産額は少ないが、与論島発祥とされるロープ曳きトビウオ浮敷網漁業や追込網漁業等の沿岸海域での伝統漁法も今なお継承されている。

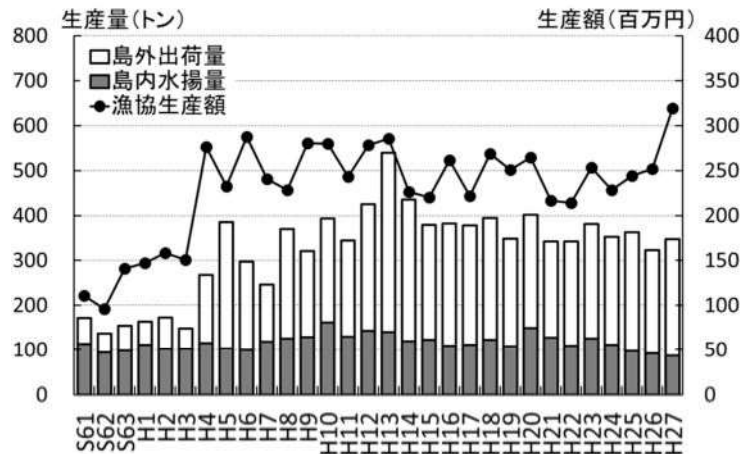


図2 与論町漁協の生産量と生産額

### 3. 研究グループの組織と運営

与論町漁協青年部は平成5年の発足後、活動が停滞したため、平成19年にいったん休止した。休止後も、青年部という組織ではなく、漁協や離島漁業再生支援事業に係る漁業集落の一員として、現在の漁協青年部員も、地元小学校での魚食普及授業や祭りなどの地域イベントでの加工品販売などを行ってきた。再始動のきっかけは、県大島支庁の水産普及員から、青年部の再発足により若手漁業者同士の情報共有の強化、それに伴う漁業収益の向上や水産業サイドから地域活性化に貢献できるのではと話があったことや、奄美群島管内の青年部で構成される奄美群島水産青年協議会からの強いオファーがあったこと、そして一番のきっかけは、これからの島の水産業は自分たちで盛り上げていかなくてはならないという使命感からである。

平成27年6月24日に再始動して、まだ1年足らずであるが、漁業振興だけでなく、青年部とほぼ同時期に発足した女性部と連携した与論産水産物加工品の販促活動や、現在漁協が力を入れている水産業と観光業を融合したブルー・ツーリズムの推進にも取り組んでいる（写真1）。



写真1 漁協青年部(上)と女性部(下)

#### 4. 研究・実践活動取組課題選定の動機

前述したが、与論島は過去に年間 15 万人以上の観光客が訪れ、中心地である茶花市街地は、観光客が押し合うほどの混雑で、その様相が東京の銀座を思わせたことから、「銀座通り」と命名されたほどである。しかし、離島ブームが過ぎ去ると、観光客数は減少の一途をたどり、ヨロンマラソン等のイベントを毎年開催しているが、昭和 61 年には 10 万人を下回り、平成 24 年にはその半分である約 5 万人という最低来島者数を記録した（図 3）。

これら観光客・町人口の減少（国勢調査、昭和 60 年：7,222 人、H27 年：5,190 人）により、ホテル、民宿などの宿泊施設や居酒屋及びレストランなどの飲食店が減り、島内産水産物の価格にも影響を与えてきた。

島内水揚量の主要魚種であるカマスサワラを例に挙げると、島内水揚量の平均単価が平成 3 年頃は 900 円台であったのに対し、平成 26 年には約 400 円と半値以下になっており、漁家経営を圧迫している（図 4）。

私は与論島に平成 18 年に U ターンで帰島後、与論町漁協の組合員として、沖合の浮魚礁で太物（キハダ、メバチ等）狙いの旗流し漁業、沖合の天然礁で瀬物（ハマダイ、アオダイ等）を対象とした一本釣漁業、沿岸海域でイセエビ、ヤコウガイ及びタコ等を対象としたほこ突き漁業を組み合わせることで操業している。実家が釣り具店で、父が遊漁船業をしていたこともあり、現在は、沖合での船釣客を対象とした遊漁船業も兼業している。船釣客はリピーターが多く、中には 10 年以上通ってくださるお客様もいる。しかし、一般の観光客が遊漁船をチャーターして船釣りを希望することは少なく、小さな子供や女性にも釣りや海を楽しんでもらいたいという思いがあった。

そんな時、県大島支庁の水産普及員から、奄美群島の漁業者や市町村等で組織する奄美群島水産振興協議会が県地域振興推進事業を活用して水産業と観光業を融合したブルー・ツーリズムの推進事業に取り組んでいることを聞き、島の魅力である美しい海を活かして島外から観光客を呼び込み、島内需要の拡大を図ることで、漁業者の経営圧迫を打開するきっかけになるのではないかと考えるようになった。

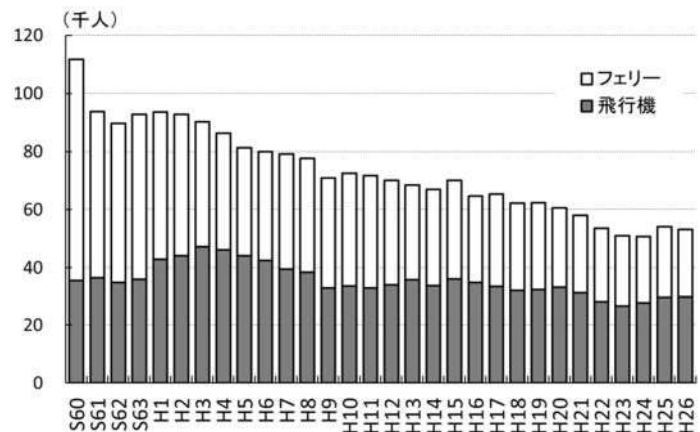


図 3 与論島への来島者数の推移

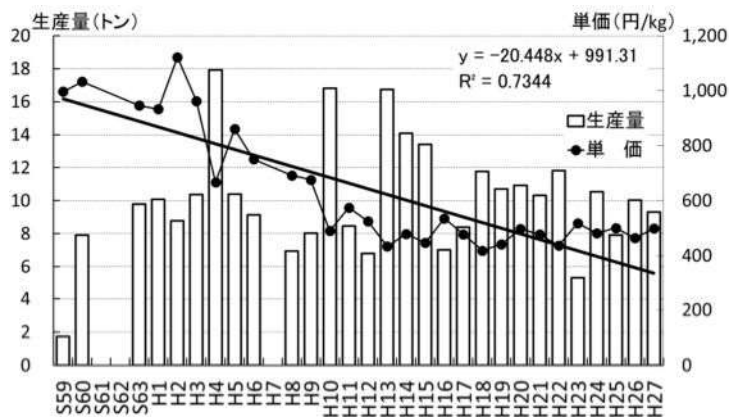


図 4 カマスサワラの生産量と単価の推移

## 5. 実践活動の状況及び成果

私はブルー・ツーリズム活動に取り組むにあたって、まずは島外への与論島産水産物の認知度向上を図るため、島外イベント等での販促活動が必要と感じていた。それは、漁業だけでなく、与論島で水揚げされる水産物やその加工品等の魅力も併せて、与論島の水産を体感（見る，触る，食べる）してもらいたかったからである。

### （１）与論産水産物の加工品販促活動

近年の与論町漁協の水揚げ量は年間 350 トン程度で推移しているが、約 7 割を鹿児島県本土や沖縄県へ出荷している。しかし、これまで島内小学校での魚食普及活動やお魚祭りでの販促活動を行ってきたが、島外での実施は、毎年奄美大島で実施される奄美群島全体のお魚祭りのみであった。

与論島では離島漁業再生支援交付金を活用した与論島漁業集落が水産物加工品開発を行っており、私は平成 23～26 年までの 4 年間代表を務めていた。

丁度このころ、奄美群島の水産物直売所等で構成される「奄美いしょむん<sup>※1</sup>ネットワーク」が奄美群島水産振興協議会により組織されたので、与論島漁業集落もこれに参加した。平成 24 年には鹿児島市おいどん市場で実施された販促会、平成 26 年には鹿児島市マリポートで行われた県漁連主催のお魚祭り「シーサイドピクニック 2014」にネットワークの他会員と共同出店し、与論島のソデイカとモズクの加工品を中心に販売した（写真 2）。

さらに、漁協は、これまで以上に加工品開発や販売会を実施するため、平成 27 年 6 月 24 日に与論町漁協女性部を立ち上げた。これにより、これまで漁業集落で製作したソデイカやモズクなどの加工品と併せて、与論島で水揚げ量が多いにもかかわらず、加工まで手が回らなかった「アイザメ」を活用した商品開発を新たに手がけることができた（写真 3）。今後、水産物品評会等への出品を目指し、観光客のお土産品だけではなく、ホテルや民宿などでも提供していきたいと考えている。



写真 2 販促会出店風景



写真 3 与論産ソデイカ，アイザメを活用した加工品

### （２）ブルー・ツーリズム素材の発掘

「与論島だからこそ」をコンセプトとして、きれいな海で小さな子供や女性にも

安心して楽しんでもらえる漁業について検討した。その結果、与論島発祥と言われる伝統漁業である「ロープ曳きトビウオ浮敷網漁業」と、与論島で昔から楽しまれているリーフの中で色鮮やかな熱帯魚を覗きながら釣る「くさび（ベラ）釣り」を体験商品の候補にすることとした。しかし、候補となった体験商品は、私自身もほとんど経験がなかったため、島内で少人数の参加者を募ってのモニターツアーを実施することにした。

平成 26 年 8 月 20～21 日の 2 日間に、10 代～30 代の町民や役場観光課職員など合計 10 名（各 5 名/日）を対象に実施し、体験終了後は参加者へアンケート調査を行い、体験商品の内容、満足度及び改善点等について、率直な感想をいただいた。アンケートには、「与論の海を満喫できた。」、「海には怖いイメージもあったが、漁師さんと一緒だったから安心して楽しめた。」といった嬉しいコメントが多く寄せられた。一方、「日陰がなく、暑かった。」、「船にはトイレがなく、船酔いもキツかった。」といったコメントもあり、今後の課題が浮き彫りとなった。ただ、初めての取組で全員が怪我なく終了できたことで、安心安全な体験商品としての第 1 歩を踏み出せたことが何よりであった（写真 4）。



写真 4 モニターツアー参加者との記念撮影.

左：8 月 20 日、くさび釣り体験 右：8 月 21 日、トビウオロープ曳き体験

### （3）ブルー・ツーリズム商品の育成

モニターツアー後のアンケート調査により、海上でのトイレ、船酔い、マスクやフィン等の遊泳道具の整備など様々な課題が浮き彫りになったが、取組を始めたばかりの我々には、多額の設備投資は不可能だったため、関係者で協議を進めながら必要最低限の資材を整備することになった。

1 つ目が日陰の確保である。「トビウオロープ曳き体験」と「くさび釣り体験」は主に夏に実施することが想定されるため、熱中症対策は必須課題であった。対策として、簡易式のテントとクーラーボックスを購入し、日陰と冷たい飲み物を確保することにした。2 つ目が体験時の安全性の向上である。ブルー・ツーリズムの体験者には安全のためライフジャケットを着けていただくが、サイズが合わないといった意見があった。対策としてマリンレジャー用品であり、ベルトを締めることで

体に密着するシュノーケリングジャケットを複数サイズ購入することとした。また、海上で漁業者からの指示が聞こえるように、防水型の拡声器の準備や、サンゴなどで怪我をしないようにマリンブーツも複数サイズ購入して、安全性の確保を図った。

最後に船上での体験時に避けて通れない「船酔い」の問題であるが、参加者によって船酔いの度合いは様々で、一様に対応できない。申込時に漁協から注意事項として「前日によく寝ること」、「朝食は抜かないこと」そして「必要であれば酔い止め薬を持参すること」といった内容を説明することになった。しかし、念のため、漁協でも酔い止め薬を準備することや、怪我をした際に応急処置ができるよう、救急箱を併せて準備することになった（写真5）。



写真5 必要資材の整備

必要最低限の対策により、モニターツアー時の課題が改善されたかを検証するため、また、観光客へ提供する体験商品としての完成度を評価してもらうため、島外の旅行代理店関係者を与論島へ招待して実際に体験していただくことにした。平成27年9月14～16日の3日間で鹿児島県本土と大阪府の旅行代理店関係者に参加していただき、再度、体験商品の内容、満足度及び改善点等について率直な感想をいただいた。関係者からは「与論島が誇る綺麗な海を肌で体感できる商品だったので、非常に良かった。」、「釣りは全くの初心者だったが、比較的簡単に釣ることができたので、小さな子供連れの家族旅行者や女性だけの女子旅などにも紹介できそう。」といった非常に高い評価をいただいた（写真6）。しかし、船上での体験では出航後1時間ほどで関係者全員が船酔いで動けなくなった。船酔いの問題は、ハードルの高いテーマである。



写真6 旅行代理店関係者

#### （4）ブルー・ツーリズム商品のPR

モニターツアーを通して与論島におけるブルー・ツーリズム（漁業体験）を商品化した。我々の取組を観光客に認知していただかなければならない。そこで、奄美群島水産振興協議会が平成24年度から有力旅行雑誌にブルー・ツーリズム（漁業体験）の紹介記事を掲載していたため、平成26年度から与論島に1ページを割り当ててもらい、併せて、与論島で水揚げされる水産物やその加工品の販売店や飲食で

きる店を紹介することにした。また、私を含めた数名が遊漁船業を兼業していることもあり、メイン商品である「トビウオロープ曳き体験」と「くさび釣り体験」に併せて、「沖合ジギング釣り体験」を掲載した。こちらについては常連の船釣客から「旅行雑誌に掲載されていたね。」といった声だけでなく、初めて予約される釣船客から「雑誌を見て連絡しました。」といった声が多かったことに驚いた。確実に我々の取組が島外の一般観光客の目に止まっていることを実感した。

## 6. 波及効果

現在、鹿児島県と沖縄県は共同で平成 30 年の世界自然遺産登録を目指しており、登録後は観光産業の活性化や知名度を利用した水産物やその加工品のブランド力の向上などが期待されている。そのため、奄美群島では一丸となってこの世界自然遺産登録を推進しており、水産業に携わる我々漁業者も島の魅力である綺麗な海を活かしたブルー・ツーリズムの取組を推進することで協力している。これにより、平成 27 年度までに奄美群島全体でブルー・ツーリズムを商品化し、有力旅行雑誌等で全国に PR している（表 1）。

また、今回の取組を通じて、同じ奄美群島他漁協からの漁業研修等の依頼が相次ぎ、漁業振興へも微力ながら貢献できたのではないかと考えている。その中でも、平成 27 年 8 月 3～5 日の 3 日間で「ロープ曳きとびうお浮敷網漁業」の研修のため来島された奄美漁協大和支所では、漁業だけでなく、我々と同様にブルー・ツーリズムに取り組んでいる。平成 28 年 10 月 1 日と 8 日には、大和村でモニターツアーが実施され

（写真 7）、今後もお互い情報交換などを通して切磋琢磨していければと考えている。

一方、与論では新たなブルー・ツーリズム商品開発の動きがある。漁協青年部の

表 1 奄美群島におけるブルー・ツーリズム商品

| 奄美群島     |      | ブルー・ツーリズム商品      |
|----------|------|------------------|
|          | 市町村  |                  |
| 奄美大島     | 奄美市  | カツオ・シビ釣り・捌き・加工体験 |
|          |      | クルマエビ掴み取り体験      |
|          |      | ウミブドウ摘み取り体験      |
|          | 大和村  | ウニ割り体験           |
|          | 宇検村  | 待ち網漁業体験          |
|          | 瀬戸内町 | クロマグロ給餌見学        |
| 真珠取り出し体験 |      |                  |
|          |      | 計 7 商品           |
| 喜界島      | 喜界町  | カワハギ船釣り体験        |
|          |      | 定置網漁体験           |
|          |      | 計 2 商品           |
| 徳之島      | 徳之島町 | ヤコウガイ細工加工体験      |
|          |      |                  |
|          |      | 計 1 商品           |
| 沖永良部島    | 和泊町  | ういじくさび体験         |
|          | 知名町  | 追い込み網漁体験         |
|          |      | 計 2 商品           |
| 与論島      | 与論町  | くさび釣り体験          |
|          |      | トビウオロープ曳き体験      |
|          |      | 計 2 商品           |



写真 7 大和村でのモニターツアー

一人が与論島の新たな水産物特産品を増やそうと、喜界島へウミブドウ養殖の研修を行い、現在安定した生産体制の構築を目指している。これが実現できれば、ブルー・ツーリズムにもつなげ、ウミブドウの収穫体験などを実施したいと語っている。ウミブドウは陸上水槽を使つての養殖であることや、夏場に最盛期を迎えること、そしてなにより、海が荒天で時化ていても安心安全に観光客へ提供できるので、期待している。

## 7. 今後の課題や計画と問題点

現在の大きな課題は、これまでモニターツアーや招聘事業を通して商品化した「くさび釣り体験」と「トビウオロープ曳き体験」に、観光客の受入実績がないということである。その要因は、体験料金が他のマリンレジャーと比べて高いことであると考えている。モニターツアーや招聘事業で料金設定の改善を指摘されたが、現役漁業者が取組を行っているため、ある程度の人件費を計上しなければブルー・ツーリズムの取組への賛同が得られない（続かない）のである。

私はこの問題の解決策として2つの方法を検討している。1つは現役を退いた年配漁業者の協力を得て、人件費を下げることであれば、体験料金を下げることができるのではないかと、2つ目は団体旅行や修学旅行などを対象に受入人数を増やすことで、人件費を下げずに体験料金を下げることができるのではないかと、この2つの方法を検証していくためには、ブルー・ツーリズムの取組を一時の活動ではなく、継続して行っていくことだと考えており、再度、漁協全体でこの取組の意義や島の現状を理解することが必要であると考えている。また、2つ目については、私が帰島する以前から父が中心となり、修学旅行を対象とした防波堤での「釣り体験」を毎年実施しているという実績もあるため、今後は「釣り体験」から「くさび釣り」へシフトしていきたいと考えている(写真8)。



写真8 修学旅行での釣り体験

与論島は周囲約20km、標高は100mもない小さな島であるが、観光客にとっては多種多様な与論産水産物が味わえ、360度広がる綺麗な海を体感できる「夢の島」でありたい。

ブルー・ツーリズムの取組によって観光客を与論島へ呼び込み、居酒屋やレストラン等の飲食店、ホテルや民宿等の宿泊施設から島内産水産物の需要が高まることで、漁協や漁業者を取りまく地域の活性化につながると信じて、与論島の水産を「見る」、「触る」、「食べる」という、ブルー・ツーリズムの実現を目標に、今後も周囲と協力してよりいっそう頑張りたい。

※1 いしよむん：磯物の意